

平成30年度第3回京都府認知症疾患医療センター連携協議会
摘 録

- 日 時 平成31年3月4日（月）16：30～18：15
■会 場 京都府医師会館 601会議室
■出席者 別紙のとおり
■内 容

1 開会

定刻により、事務局が開会を宣言。委員長代理として高齢社会対策監が挨拶。

2 報告事項

(1) 平成31年度京都府認知症関係予算案について

- 資料に基づき京都府高齢者支援課から説明

(2) 成年後見制度における診断書の書式の改定等について

- 資料に基づき京都家庭裁判所から説明

3 意見交換

(1) 認知症疾患医療センターの日常生活支援の相談機能の強化について

- 資料に基づき京都府高齢者支援課から説明し意見交換

(意見)

- ・地域包括支援センターから紹介を受けて診断するケースがあるが、診断前後で連携する。
- ・サービス利用を家族が拒否的であるケースは初期集中支援チームと連携する。
- ・外来患者への支援は不足している。本人や家族の交流会のような取組も行っていない。
- ・認知症疾患医療センターの周知不足もあると考えられるが、重度化した方の受診が多い。
- ・地域に認知症カフェがあるため、病院として後方支援している。
- ・近隣に3か所精神科の病院があるため、初期認知症の方をスムーズに認知症カフェにつなぐ仕組みを検討中。
- ・人員不足の課題があるが、求められた際に情報提供するのではなく、独居の方、MC I や軽度認知症の方等地域につないだ方がいいと思われる方を積極的につなぎたい。
- ・地域包括支援センター等から紹介を受けたケースは診断時の対応をフィードバックしているが、単に受診に来られた方は相談先や資源を紹介しているに留まる。
- ・全てのケースをフォローできているわけではない。次年度以降家族教室を実施したいと考えている。
- ・全てのケースをフォローできているわけではない。サービス利用につながらない対応が難しいケースは初期集中支援チームと連携するようにしている。
- ・相談員は初診のインテークを行い、診察に同席し、診断後の本人・家族・支援者のディスカッションに同席し、その後のフォローを行い、テニス教室や絵画教室、初期集中支援チーム、アクションアライアンスにも携わる。

- ・来週、本人家族の交流会を実施予定。
- ・相談員が本人家族と面談を行うが、全ケースできているわけではないので体制を強化したい。

(MCI と診断した患者について、どのように対応しているか)

(意見)

- ・活動的に過ごしていただくよう助言している。
- ・本人と家族同席のもと、運動療法や食事療法について説明をする。
- ・3か月に1度受診してもらうようにしているが、他にいい方法がないかと思っている。
- ・これといったことはできていない。半年～1年後に受診いただく程度。
- ・MCI でも検査をするとアルツハイマー病を疑うこともある。半年から1年後に再度受診いただくか、希望されれば継続的に受診いただく。
- ・つなぎ先がないことが困る。常設型カフェもほとんどないので、この課題を解決する手段のひとつが本人家族教室。
- ・地域包括支援センターと連携していることは分かったが、どのようなサポートをしているのか、検証が必要だと感じた。
- ・認知症カフェについて、行政が主導しているものだけではないため、必ずしもカフェの特性が周知されているわけではないとも感じる。
- ・地域包括支援センターとの連携という話が多いが、万能ではないとも感じる。地域包括支援センターとしては連携先にも伴走してもらいたいと感じている。
- ・地域包括支援センターと認知症疾患医療センターとの役割分担についても見えていないようにも感じており、顔の見える関係づくりが必要。

(2) 認知症本人・家族教室について

■資料に基づき京都府高齢者支援課から説明し、意見交換

(意見)

- ・家族からは今後利用できるサービスや進行の目安を尋ねられることもあり、テキストがあれば、情報提供や家族のピアサポートの場をつくる機会にもなる。
- ・地域の認知症カフェや介護予防事業所で使用できると考えている。
- ・地域につなぎ切れていない MCI の方など、抱えている不安に応えるツールになる。
- ・疾病教育ができれば状況が変わるケースもあるため、地域包括支援センターと連携しながら伴走支援できればよい。
- ・家族教室を検討しているが、テキストがあると行いやすい。
- ・本人が参加することについて、重度の患者が多いのでどこまで本人が参加できるか。
- ・6回シリーズについてもどの程度参加できるのかということは今後行ってみないと分からない。
- ・現在は6回シリーズで国立長寿医療研究センターのテキストを使用して家族教室を行っている。
- ・MCI の方は案内はするが、参加されていない。

- ・テキストについて、生活の工夫など内容は良い。
- ・家族教室が関係者も含めた交流につながれば良い。
- ・現在の6回シリーズについて、全てには参加されないこともある。
- ・本人が来られることは少ない。本人はデイサービスに行かれていることが多い。
- ・初期の人について、特に本人が男性の場合が多いが、配偶者が多くの情報を調べていて、例えばカフェの利用など「進めてください」と言うが、本人は「まだ早い」と言ったり、そもそも出不精ということもある。
- ・病院には本人も家族も訪れているので、病院からそのまま教室や交流会につながるができる。
- ・交流会はピアサポートの場にもなる。本人同士がつながれば、「お前が行くなら俺も行く」と自然な流れができ、家族支援にもつながる。早期からの本人支援、家族支援を連続して行う最初のきっかけとして病院は重要。
- ・京都のリンクワーカーのイメージは日常生活支援の相談機能の強化事業。
- ・初期で介護保険に結びつかない人をどうするか。本人に話を聞くと、尺八づくりなど趣味をお持ちのこともある。
- ・教室の意義は大きい。6回シリーズに全て参加されるか、参加人数増えた際にスタッフが確保できるかは課題。
- ・今回の交流会は本人と家族を分けて交流会を行い、本人は音楽療法を体験いただいた。
- ・カフェでどのように教室を実施するかは検討が必要。
- ・本人の言葉を伝える回について、本人と接している者が担当しないとうまく伝えられない可能性はある。
- ・メインは交流会。カフェをうまく使い、例えば複数のカフェが合同で行ったり、屋外で散歩しながら行うこともあり得る。